

第21回スタディツアー

(2022. 7. 12～7. 22)

〈今回は行きたくなかった〉

コロナも心配だし、2年半の間隔の間に、バングラデシュの子どもたちに会って何かしたいなあという気持ちも薄れていて、モチベーションも下がっていた。嫁さんはきっと反対するだろうと思っていたら「行ったらハチミツや香辛料を買って来て」と言う。大西さんは「皆さんは1週間か10日ほどで、私は延長して一か月ほど滞在したい……」と言っていた。みんなと一緒にの行き帰りでもまごまごするのにそれは困る。ずっと行きたくないと言いつつ、全員が10日間の日程にするとおられてしぶしぶOKすることになってしまった。



ベンガル語はもちろん、英語もできない。それに、もともと人と話をするのが好きではない。どちらかと言えば黙って何か作業をしている時、ぼくはいちばん気持ちが落ち着く。ワンドロップ小学校に行って、何もしゃべらなくてもいいなら、学校のトイレをいつもピカピカにしておく、校庭の草刈りをする、生徒が気持ちよく勉強できるように教室をきれいに整えておく、そんなことなら1か月でも2か月でもぼくは居続けることができるのになあ、と思ったりする。

〈あまり役に立てていない〉

支援物資運びとカメラマンの役をすればいい、といつも思っているが、今回は一人20キロの制限があって、たいした荷物運びの役もない。カメラマンの役目はどうかと言えば、岡さんが子どものそばに近づいて笑顔で話しかけ、子どもと心を通わせながらスマホで写真、動画をたくさん撮っている。ぼくの場合は、カメラのファインダーを覗きながら子どもたちのいい表情を撮ろうとするが、声かけもぎこちなくて、どちらかというところぼくからの一方向の視線で見ているだけ。子どもたちと双方向の気持ちのやり取りがない。

年のせいだけではないが、最近もの忘れがはげしくて人の名前が覚えられない。生徒の名前も卒業生の名前も分からない。先生の名前でさえ、ラブリー先生だけがわかるぐらい。岡さんは生徒全員の名前と顔が一致する。これは記憶力の問題ではなくて、子どもたちへの愛情の強さだと思う。大西さんや岡さんがベンガル語を覚えようと努力しているのも、バングラデシュの人たちへの熱い思いがあるからだと思う。ぼくは子どもたちの前ではニコニコ、さもやさしそうに笑顔を見せているが、声かけもできず、名前もわからない。だからぼくは、生徒のことも先生のことほとんど何も見えていないということを実感している。



バングラデシュの子どもたちや先生らに熱い気持ちを持って取り組んでいない怠け者のぼくは、スタディツアーに行ってもあんまり役に立てていないと反省している。

〈きれいごとでやっている支援ではない〉

今回、先生らの間で盗み、ウソ、体罰、怠け、指導力のなさ……、いろんな問題が明るみに出た。しかし、このことでも、ぼくは自分で見て、聞いて、その場に居合わせたのではなく、後から聞いて知ったくらいで、見えていないことばかりだと感じている。

ただ、ワンドロップ小学校で問題がいっぱい明るみに出たことについては、むしろいいことだと思っている。貧しい子どもたちのために支援しているワンドロップの活動は、きれいごとでやれているボラティアではない。嫌な問題も抱えていて、そのことに四苦八苦しながらかかわっていかなければならないというのが本当の取り組みなのだ、と思う。

ワンドロップ小学校の先生たちからサラリーアップの要望が出ている。現在の給料は、それほどいい金額ではないのだろうけど、支援するぼくらには資金力もないのだから、かつかつ生活していける金額として辛抱して働いてくれたらいいのには思っている。

先生らの問題については、誰が誰やらあやふやなぼくにも感じることはあった。子どもたちのために熱心に努力しようという気持ちがない先生もいるし、すすんで研鑽を積もうという姿勢もないようだ。先生どうして生徒指導や教科指導で議論しようという雰囲気もなさそうだ。校務員のおばさんも表情は硬くて暗いし、子どもたちのために学習環境を整えてやろうという積極的な姿勢もみられない。

先生らはサラリーをあげて欲しいと主張はするけど、これだけ努力して研修を積んで、生徒らの成績も向上した、という成果でも見られたら、サラリーアップを考えてもいいかとは思いが……。自分たちのやっていることを振り返らずに要求しているだけなら辞めて、もっとサラリーのいいところへ行けばいい。そして能力の高い先生に代わってもらえればいいのだけれど、支援する側のワンドロップの力を考えると、財政的にも思うようなことはできないのが現実だろう。

〈明るく楽しく過ごせる学校〉

ワンドロップは、教員資格もある質の高い先生が雇えるのかどうか。教材教具、施設、設備などの点でも十分なことができるのかどうか。

1クラス20人、5学級100人規模の小学校としては、日本の小学校とは比べものにならないくらいわずかな予算規模での運営をせざるを得ない。



ワンドロップ小学校では、Cランクの生徒たちが、卒業後それなりに仕事があって、そこそこ生活できるようになることを目標にする学校であればいい。そのために小さな職業訓練校を作りたいというタリクさんの考えはいいと思う。Cランクというのがどういうものかよく分からないが、上の学校に進学するような優秀な人材を育てる学校ではもちろんない。



そして、この学校で働く先生は、教員資格がなく、教員としての資質が欠けている人であっても、安い給料で子どもたちと楽しく明るく働いてくれる先生であればいい。

先生らにはあれもやって欲しい、これもやって欲しいと注文を付けたいことがあるけれど、限られた予算規模でどれだけのことができるのか。ぼくの村の福田小学校はワンドロップ小学校と同規模。この学校の教職員、研修体制、施設設備、運営予算と比べてみて、無理な要求はできないのではないかと感じてしまう。だから、ささやかなことしかできなくても、子どもたちが5年間楽しく過ごせる学校生活だったらいいのではないか。そのために安い給料でもなんとか我慢して頑張ってくれる先生であればいいのでは、と感じている。

〈先生や校務員にやって欲しいこと〉

ぼくが定時制高校の教師をしているときは、自分のことは後回しで、何もかも生徒のために走りまわっていた。家庭訪問をし、職場訪問をし、職業安定所に連れて行き、奨学金を取らせるために奔走していた。生徒と楽しいこともいっぱいした。保護者会では授業参観もして、ベトナム料理や韓国料理の料理教室もした。ぼくの場合は、高額な給料をもらっていて、その給料のほとんどをぼくが好きなように使っていた。だから、できたことだとは思っている。



そんなことをワンドロップの先生にしてもらおうというのは馬鹿げたこと。バングラデシュの人たちの国民性も違うという。「やる気ない、なまけ、だまし、うそつき、こういう人も含めてバングラデシュだ」というような意味のことをタリクさんは象徴的に言っていた。

「なんでこんなことをするのか?」「なんでこんなことができないの?」とあきれられるようなことがあるのだろうけど、バングラデシュでの取り組みは、押ししたり引いたりしながらつき合っていくしかないのではないかと感じる。それも、1年に2回、10日間ずつのスタディツアーの際の付き合いでは、かなわないことばかりだと思うが。

〈先生らにして欲しいこと〉

ぼくの中で見て感じたことで、やってもらえそうなこと。

校務員には、教室、廊下、校庭をきれいにしてもらおう。子どもらには、下校前に教室を掃除し、机、椅子を拭く。そのための掃除道具を整える。終業時にSHRの時間をとって、クラス担任が掃除指示、連絡事項伝達をする。

教科指導では、年間指導計画(教科目標)を作成する。毎日の出席を記録する。年に何回か定期考査をする。新学期のはじめに身体測定をする。生徒の体調管理に心がける。これらを記録し資料として残しておく。

クラス担任として、どんなクラスにしたいか、どんな生徒に育てたいか、一年間の目標を立てて記録しておく。

施設設備のことで考えたこと。子どもたちに本を読む楽しさを感じさせるため図書室を作ろうと言う。しかし、図書室は管理が大変。今回、絵本を20冊ずつケースに入れて各教室に置き、空き時間などに自由に本を読めるようにしたのは、とてもいい。クラス担任が管理

しやすい。

施設設備のことではむしろ職員室を作りたい。先生は今、個人ロッカーもなく、授業に行く時も自分のバッグを肩にかけてうろうろしている。

職員室には個人ロッカーと自分の席もある。職員会議というほどでなくても、その日の打ち合わせをして仕事を始め、終わりには翌日のことも話せる。今は、先生たちは空き教室などで三々五々集まって雑談している。これでは世間話やうわさ話、ひそひそ話になってしまって、生徒指導や教科指導などを話し合う場にはならない。

文房具類盗難の件も含めて、ラブリー先生をチーフティーチャーとして位置づけ学校運営、管理に当らせるということになった。それはいいとしても、6人の教師と1人の校務員の7人の集団が職員室に集まって、きちんと会議をして学校運営をする体制を作らなければ、ラブリー先生のもとにまとまって仕事をするにはできないと思う。



〈体罰のこと〉

朝礼時間に遅れて登校した子どもの頬を先生が激しく叩いた。離れた所からもバチンという音が聞こえたくらいだったそうだ。その子の頬は赤く腫れていた。周りにいた子らも怯えた表情だったらしい。

はじめその教師は体罰をしたことを認めなかった。注意のため軽く叩いた程度というのだろう。大西さんがその教師と話をして、体罰は絶対にだめなことを説いたが、なかなか受け止めようとしなかったらしい。別の場所で、タリクレストランのオープンセレモニーに先生らも招待されていて、セレモニーのあとサラリーアップなども含めた学校運営上の話し合いがもたれた。そのとき体罰のことも話があって、ようやく教師は体罰を認め謝罪した。

ぼくは、体罰をした教師は、子どもにはもちろん、その家に出向いて家族にも謝罪すべきだと思っていた。こんな場合、教師が親に謝罪する形をとれば、バングラデシュの親たちは、教師や学校に対して不当な要求をふっかけてきて困ったことになる、というのがタリクさんの考えだったようだ。

このことではまた、ぼくは自分自身が恥ずかしくなった。あとになってみんなで話し合っていた時、大西さんから話があった。

「そのとき、その場にいた者がどういう対応をしたのかが肝心だ。子どもが怯え、怖がっているとき、許せないことだと、とっさに教師の間に入って制止し、子どもをかばう態度がとれなかったことはどうなのか。私なら反射的に行動していただろう」と。

あとになって体罰について理屈であれこれ言っても、体罰を受けた子どもの心を救うことにはならない。そばで見ている子どもにも深い心の傷を負わせたとに違いない。その子どもたちの心を救うのは教師への注意の言葉ではなくて、その瞬間に子どもをかばって教師の前に立ちはだかること。ぼくはその場に居合わせず、ぼんやり朝礼の様子を見ていただけだった。もしその場にいても、戸惑うだけで行動がとれなかったに違いない。お恥ずかしい人間

ですね。

今回のスタディツアーで大西さんはしきりに教師たちとも、タリクさんとも自分の主張をぶつけて議論していた。自分の意見を持って、議論し、対峙していく人がらに頭が下がる。

リキシャに乗って、不当な料金をふっかけられたとき、わずか10円か20円のことで大西さんは許さない。ぼくは、そんなにむきにならなくてもいいのにと甘いことを考えているが、不当なことは絶対許さないという大西さんの信念につながっていることだと、いつも思っている。

(今回、ダッカのマーケットで買物をした帰り、ホテルまでCNGで帰ることになった。大西さんは、今回は料金のやりとりはしません。要求してくる額を払います、と笑っていたが、40タカと表示された料金どおりの請求に拍子抜けだった。そして、ぼくらが降りたあと、CNGは車輪がパンクしたのか、運転手が席を降りて手押しで車をわきに寄せていた。



料金も規定通りで良心的だったのに、そのうえ車がパンクしてかわいそうに、とみんなで同情した)

〈シャティのこと〉

14歳。それにしても体が小さい。ワンドロップ小学校3年に在籍していたが、家庭の事情があってタリクさんの家に引き取られた。学校も辞めさせられ、メイドとして他人の家で暮らす境遇を思うと、切なくなる。70年近く前のぼくの家でも、上の姉が小学校にも行けず親戚の家に奉公に出され、紡績工場の女工として働いていたが、今のバングラデシュではよくある現実なのだろう。



彼女はよく気がつく子で、家事などテキパキとこなし、ときどき見せる笑顔がかわいい。軟弱な精神のぼくだったら、同情心いっぱいできっと甘やかしてしまうにちがいない。

実の子どものように、きびしくもやさしく育ててもらっているのに、ルニさんの言うことを聞かないことが多くなったらしい。夜遅くまでスマホをいじっていたり、朝起こしてもなかなか起きようとしなかったり、わがままを見せるようだ。他人の家に世話になっている身なら、ぼくだったら卑屈になって、表向きいい子ぶって従順な子になりきることができるのだが。

時にはきびしい言葉でタリクさんに叱られることもあるだろう。「言うことを聞かないなら親元に帰らせる」とも言われている。「家事手伝いをしているだけはダメ。近くの小学校へ行くように」と言われても行かない。「それなら家庭教師に来てもらって家で勉強しなさい」とタリクさんに言われて、「ありがとう」とも言わず、「うん」とうなずいている。「勉強して上の学校へ行き、将来はワンドロップ小学校の先生になるといい」とまで考えてもらっている。ここまでよくしてもらっているのに、彼女はあまり大喜びする顔を見せない。

彼女は2年遅れの卒業式に一期生に混じって出席し、卒業アルバムももらえた。途中退学して、他人の家、それも校長先生の家にお手伝いとなっている身を、卑屈にならずに明るく

振る舞っている。周りの子らも同窓生としてごく自然に受け入れているのが実にいい。

人の顔色ばかり見て生きてきたぼくには、テキパキ動く彼女、笑顔の彼女、時にわがまま娘の彼女、そのありのままの姿が、かわいくて、たくましくて、とても印象的だった。

〈おまけ〉

ラジョンさんが辞めて、タリクさんの車が一台減った。残りの2台は、ポンコツで乗る前にラジエーターの冷却水を足さなければならないピックアップの車。エンジンも止まりがちで馬力がない。もう一台の乗用車はショックアブソーバーが壊れて人がたくさん乗れない。体重の重い人は乗ってはだめ、などと冗談も。しかし、そのおかげでぼくらはピックアップ車の荷台に乗ることができた。爆走するバスやトラックが巻き上げる強風と埃を受けながらも、楽しいドライブを体験することができた（笑）

〈終わりに〉



いろいろ皆さんの助けがなければ、ぼくはバングラデシュへ行けないのですが、今回もたいしたこともできず、自分の情けない人間性を感じさせられながらも、それでもワンドロップ小学校の子どもたちから笑顔をいっぱいもらえたことをうれしく思っている。

もしバングラデシュでコロナに感染したら帰れなくなると心配したが、さいわい 72 時間前の検査で全員陰性。タリクさんが紹介してくれた病院では、ヤクザのぼくが言えば全部陰性にできる、いや、一人を陽性にしてみんなを 2 週間滞在延長させることもできるなどと冗談も言っていた。

帰国後、大西さんが陽性になったが、ぼくらは抗原検査で陰性。スタディツアーでは、特にぼくは、何から何まで大西さんの世話になっているのに、コロナのことまで、みんなの分を引き受けてくれていたのだと思って深く感謝している。

（山中 勇）